

「土の器」 コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章7節—15節。

- 1、 コリントの街での伝道はパウロにとって、価値観の闘いであった。貿易の港町、商業都市のお金、権力、地位、家柄、学識など世俗的価値観と「イエス・キリストの十字架の福音」即「愛」を基礎とする価値観との闘いであった。その軋轢のゆえの起る現実問題に指示を与えたのが「第一の手紙」であった。これに対して「第二の手紙」はユダヤ的伝統をもつエルサレム教会の権威主義者の推薦状を傘にして、パウロの使徒の正当性を攻撃する人々、初心の福音から逸脱した人々に対する、パウロの、自己をさらけ出し、自己の実存を架けた、反対者への批判を記した、血みどろの闘いの記録である。パウロはその間「苦難と慰めの同時性」(1章)を自ら体験し、また対立者を和解に向かわしめた福音を、「弱いときにこそ強い」という逆説で語っている。
- 2、 パウロは外部からの迫害、教会内部の中傷という試練に打ちひしがれつつ、それだからこそ福音の神髄を「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまっています。イエスの命がこの体に現れるために、わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています。死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために」(4:10-11)と逆説を語っている。これを非常に象徴的に表現した言葉が「このような宝を土の器に納めています」(4:7)である。
- 3、 コリントは紀元前7世紀ごろから、芸術的な陶器の産地として有名であった。しかし、パウロの言う「土の器」は素焼きの日常使う土器を意味した。まして金銀の器ではない。そこには「土の器のかけらにすぎない」(イザヤ 45:9)、「造られたものと造ったもの(被創造者と創造者、陶工と粘土)」(ロマ 9:20)の関係、「土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり」(創世記 2:7)などの聖書の持っている「土」のイメージが盛り込まれている。パウロは「誇る必要があるなら、自分の弱さにかかわる事柄をほこりましょう」(11:30)「弱さ以外に誇るつもりはありません」(12:5)「力は弱さのなかでこそ十分に発揮されるのだ」(12:9)、「私は弱いときにこそ強い」(12:10)という逆説を身につけている。そこがパウロの「十字架に死んだイエス」と言う根本の信仰であった。逆説とはなにか。価値の転換である。行き詰まりを突破する力である。(諺にも、急がば回れ、負けるが勝ち、急いては事を仕損じる、など)。
- 4、 「土の器」というイメージは現代的響きを持っている。そもそもイエスの存在の逆説のイメージと重なる。「十字架の死」そのものが逆説である。死を負ったありのままでよい。ここが大きな慰めになる。作家坂田寛夫さんの小説「土の器」は、母の闘病と死を扱ったものであるが、とびきり熱心なキリスト者の母もまたそれを囲み看取った者たちも「もろい素焼きの器たち」と書かれている。それでいて「根元の地軸をいま傾けつつある何か」(引用者注、神)が示唆されている。信仰者は「土の器」であるが、そこに託された逆説が人々に感銘を与える。第72回芥賞受賞作品である。